こころの臨床学会を終えて

今回は、恒例となっている当院の院内学会の歴史に少しだけ触れてお伝えしようと思います。

第 1 回の開催は平成元年で、当時は 2 日間に渡り、高松町産業文化センターと病院会議室で行われ、「院内研修会」と称してスタートしたようです。第 2 回では「院内研修会」を改組して発足し、「診療スタッフ研修会・総会」、俗称「院内学会」として回を重ねてきました。第 14 回になると、「こころの臨床学会」へと名称を変更し、会場も石川県立看護大学に移されました。それまでに、演題数が多い年では 20 題と盛り沢山な年や、参加人数も 160 名だった年があったことや、創立 30 周年記念事業として院内外からの参加者を募り、病院に隣接した「アクロス高松」での開催や、「西田幾多郎記念哲学館」での開催もありました。学会では、院内の部署ごとで取り組んだ研究課題を、準備期間として数ヶ月経て、約半年間或いは 2 年越しで熟成した研究成果を学会スタイルで発表し合い、当病院の OB となられる先生方や特別講師をお迎えして、精神医療界の流れに沿いご講演いただいたり、タイムリーな話題でシンポジウムを企画したりして、全職員参加で定例開催してきました。他には、名誉院長である道下忠蔵先生のご好意で「道下奨励賞」が発足され、当院で発表された優れた研究成果をあげたスタッフに贈られてきました。今は、「臨床研究奨励賞」として、精神科医療に対する研究を奨励し、院長から表彰されています。

そして、平成 29 年 3 月 4 日、土曜日、第 29 回石川県立高松病院　こころの臨床学会が開催されました。平成 28 年度のテーマは「地域で暮らす−リカバリーを目指して−」、参加者は 90 名で、例年に比べて若干少ない状況での開催でした。開会の挨拶で、北村立院長より、研究マインドについて、とてもわかりすく説明していただきました。研究マインドを持ち臨床に当たること、自分の考えを世に問うために智恵を絞ることで、臨床能力は飛躍的に向上するという先生の教えは、日々の業務に追われながら頑張っている職員にとっては、これからの励ましの言葉と受け止められたように思います。演題発表は 10 題で、どの演題も興味深く、これまでに続く精度の高い内容でした。演題ごとの質問は的確で、建設的な意見が多くありました。良い知恵や方策を共有するだけでなく、ひとりひとりの医療サービスの質向上に向かう進歩の糧となり、これから院外の学会発表に向けてステージアップする機会になったと思います。この後、全国的な場面で報告され、更に正式な論文となることを願っています。今年度の臨床研究奨励賞には、昨年の研究成果と今後の期待も含めて 4 名の方が受賞し、表彰されました。シンポジウムは、「自らの生活を取り戻す」をテーマに、当院の医師、看護師、精神保健福祉士、作業療法士、臨床心理士が、それぞれの活動から、それぞれの立場で考える取り組みについて話していただけました。事例を取りあげた内容には、関わりの具体がわかりやすく、流れを追いながら知ることができました。ご協力ありがとうございました。基調講演は、栃本真一副院長より、「当事者にとってリカバリーとは何か」との演題でご講演いただきました。格調高く、温かさと余裕の中に先生のお人柄を感じました。もっと聞きたかったという声も沢山いただきました。閉会の挨拶では、栃本副院長から、演題発表に対して1題ずつ丁寧に助言され、今後の院内学会への期待が述べられました。全体を通して、発表演題への質問や助言、開会や閉会の挨拶・講評に、これから研究を行なう上でとても参考になったという意見が多く聞かれました。爽やかな青空に見舞われて、恒例の院内学会は終了しました。一言にぬくもりを感じながら、新たな価値を見出せる、院内学会そのものだったと思います。無事終了したことに感謝しています。

さて、来年度は 30 回目の節目の年となります。1 部署1演題、各部署、多職種、個人の取り組みを期待しています。最後に、研修委員会としては、反省点と課題が残りましたが、これも教えの 1 つと受け止め、終わった後には「良かった！」と言える院内学会を目標に取り組んでまいりたいと思っています。